

教科書の中の村上春樹

— あるいは村上春樹の教材価値を論ずるための序説 —

原 善

I 村上春樹と国語教材

本稿が紹介する国語教科書の中に採り上げられてきた村上春樹作品一覧には、佐野正俊「村上春樹作品の教科書掲載教材リスト」¹という先行研究がある。この貴重な先行がなければ本稿はなかったのも、その仕事に大いに敬意を表するものであり、まず最初にその意義を確認することから始めたい。

そもそも所収書である『〈教室〉の中の村上春樹』がすでに、われわれには大変有難いものであった。その「まえがきに代えて」馬場重行氏が〈その〈読み〉を問うことを通じて教材価値を明らかにし、もって春樹文学の新たな可能性を引き出すことを目指し〉たと述べているように、近現代文学を研究しつつ国語教育にも関わり続けてきた者としては、そして近年研究対象を村上春樹文学へとシフトチェンジしてきて、²国語教材としての春樹作品を論じてきている³者としては、その内容に大いに期待したものだ。

優れた文学作品がそのまま優れた国語教材にはならない⁴のは、たとえば川端康成の「雪国」がいかに名作の誉れ高く昭和の文学の最高峰に位置づけられたにしても、それがそのまま（長さの問題だけでなく）教科書に掲載できるような国語教材にはしにくい事情を考

1 馬場重行・佐野正俊編『〈教室〉の中の村上春樹』（ひつじ書房、2011年8月）

2 『村上春樹—作品研究事典』（村上春樹研究会 今井清人・岩崎文人・志村有弘・原善 編）鼎書房、2001年6月）の編集、「〈ハルキ・ワールドをめぐる冒険〉喪失感を共有させるドーナツのブラックホール—長編小説「風の歌を聴け」を掲載した『〈アエラムック〉村上春樹がわかる。』（朝日新聞社、2001年12月）の編集協力、「『1Q84』は反実仮想の物語だ」「四部作は〈繋がる〉物語だ。」「家族の擬似的再生の物語」「長編が主戦場なら短編は局地戦だ」「春樹にとって露天風呂に降る雨のようなもの」「エッセイは村上のヤヌスの明るい半面だ」を執筆した『村上春樹を知りたい。』（学研、2013年4月）の編集協力を行なった他、「『パン屋襲撃』あるいは想像力について」（『原ゼミⅡ』スプーンと肉の恋人』日本大学芸術学部文芸学科、2007年11月）等を執筆している。

3 「村上春樹「鏡」が映しだすもの」（「上武大学経営情報学部紀要」第23号、2000年9月）、「村上春樹「青が消える（Losing Blue）」が消したもの—「青が消える」と“Losing Blue”—」（「昭和文学研究」第70集、2015年3月）の他、「〈オピニオン〉国語教育の混迷—文学の面白さ追いやる」（「上毛新聞」第37727号、2000年4月14日）、「村上春樹「鏡」—虚構の力を読む」（「国語教室」第75号、2002年2月）等や、この両作品の指導書を執筆している。

4 拙稿「教科書による《文学》の流通」（「芸術至上主義文芸」2005年11月）の中で山田詠美作品等をめぐってこの問題を論じたことがある。

えてみても明らかなはずだ。⁵優れた教材価値を持つ作品は、それ自体が一つの文学的な価値だと評価することができるが、その逆は必ずしも成り立たない（真ではない）のだ。したがって現在最も多くの読者を持ち、そして研究（と言うよりも追っかけ的な書物の刊行）が隆盛を極めている村上春樹の文学が、それに見合う大きな文学的な価値を持つと言えたとして（稿者はもちろんそう確信しているが）、果たして教材価値の方は村上春樹作品にあるのか否か。後掲のように沢山の作品が教科書に採られ続けている村上春樹だが、〈僕は学校という機構に対して今ひとつ好意がいただけなかった。勉強も好きではなかったし、したがって試験の成績もあまり芳しくなかった。授業は退屈だったので、だいたいずっと本を読んでいた。〉⁶、〈もう一度繰り返しますが、僕は学校という「制度」があまり好きになれませんでした。何人かの優れた教師に巡り合うことができ、いくつかの大事なことは学べましたが、それを相殺して余りあるくらい、ほとんどの授業や講義は退屈でした。学校生活を終えた時点で、「人生でもうこれ以上の退屈さは必要ないんじゃないか」と思えるくらい退屈でした。〉⁷と学校嫌いの表明を繰り返したり、〈僕も国語の授業ってあまり面白いとは思わなかったですね。とくに勉強しなくても成績はすごく良かったんですが（笑）〉⁸と国語の授業の詰まらなさを述べるのに憚らなかつたりしたどころか、〈教科書に載っている作品にも面白いものがたくさんあります。／しかし、その面白さをうまく生徒に伝えられないんです。（…）それとも、文学の良さは教えられて理解するものではないのでしょうか？〉という〈高校の国語教師〉の質問に対して、〈僕もね、正直言いまして、『こころ』ってよく理解できないんです。「文学の奥深さ」に行きつく前に、「なんなんだよ、この話は？」みたいな方に行ってしまいます。〉⁹という形で肯うことで、国語教材はもとより国語という科目の（詰まらなさどころか）存在意義そのものを否定しているとも受け取られかねない言葉まで漏らしている。そんな村上春樹が書き上げた作品の多くが教科書に採られて〈教室〉で読まれているのだが、では彼の作品の中には、学校教育の場における国語科教材としての価値なり利用法なりを本当に見出すことができるのか、果たして〈その面白さをうまく生徒に伝えられ〉るのか、その良さは〈教えられて理解する〉ことがで

5 拙稿「川端康成『雪国』における性表現/表現されない性」（『解釈と鑑賞』2008年4月）の中で紹介したことだが、千葉宣一「〈現代文教材研究講座 川端文学の史的動態1〉川端文学のエロチシズムと無常の思想—『雪国』はなぜ、教科書に採用されないのか—」（『月刊国語教育』1987年6月）と千葉俊二「ポルノグラフィとしての『雪国』」（『国文学』2001年3月）という、15年を隔てた同姓の優秀な研究者の二つの論文が、論題通りの立論を行なって、『雪国』は教材として推奨される一方でポルノとして扱われてもいるという作品の厚みを奇しくも炙り出して興味深い。

6 「僕の中の『キャッチャー』」（『村上春樹雑文集』新潮社、2011年1月）

7 「学校について」（『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング、2015年9月）

8 「質問149」（『村上さんのところ』新潮社、2015年7月）

9 「質問257」（『村上さんのところ』）

きるのか、という問題は、国語教育を離れた一般読者にとっても興味深い問題のはずであろう。

Ⅱ 〈教室〉の中の村上春樹

さてしかしでは、『〈教室〉の中の村上春樹』はわれわれ読者の期待に応えてくれたのか。〈数多い「ムラカミ本」の中に、春樹の文学及び教材の価値について本格的に論じようとしたものが見当たらないことに不満があったから〉と「まえがきに代えて」本書刊行の動機が語られているため、読者の期待の地平としては、(1)教材化された（教科書に掲載された）村上春樹作品の教材価値の解明、あるいは(2)教科書にこだわらない新教材の発掘、のいずれかがなされているだろうことが期待されていたはずである。

そして実際の目次構成は、その時点での教科書掲載教材のほとんど（つまり(1)の一部）と(2)が為されているというものである。これは一見(1)のみならず(2)にも目配りした周到な編集にも見えるのだが、そう評価されるためには実は(1)は網羅的でなければならなかったはずだ。なぜかならば、そうでなければ（後述するように）それは数ある村上春樹作品論集との差異をなくしてしまうからだ。しかし実際には、取り上げられなかった教材もあるのだ。見落とされていた「ジャック・ロンドンの入れ歯」が入らないのは（大変惜しまれるもの）仕方ないとして、「夜のくもざる」「西風号の遭難」が外されていることには疑問が残ろう。

たとえば厳正な価値評価が下されて、教材価値のないものと判定された作品が対象から外されていたのなら、それはそれで大事な見識ではあろうが、〈教室においてテスト範囲とされるより、春の午後海辺や公園でひとり読むべきものなのかもしれない¹⁰というように対象作品の教材価値を否定している論も目次の中には含まれている¹¹のである以上、そうした価値判断がなされていたとは思えない。それでは他の理由があったのか。

「西風号の遭難」が村上春樹の創作作品ではなくオールズバークの作品の翻訳だから駄目なのだとしたら、オブライエンの「レイニー河で」や「待ち伏せ」であっても駄目なはずだし、「西風号の遭難」が絵本だから採り上げないというのなら「ふわふわ」もまた取り上げられるべきではなかったということになるはずである。そしてまた「夜のくもざる」が対象として取り上げられなかったのはなぜか。かりに『現代語』科目の教科書に掲載さ

10 「ランゲルハンス島の午後」を論じた丹藤博文「ランゲルハンス島に吹く風」

11 しかし、これは教科書に載ったからそのまま優れた教材だとする短絡的な評価をするのはかえって批判的な研究だとは言えなくなるものである以上、教材化批判としては充分あっていいことではある。

れた教材だから駄目だというのなら、それならそれで現代語教材や、「西風号の遭難」のような小学校教材は除外したと、その基準を明示すべきであったろう。¹²(1)での網羅が意図的に避けられたのなら、その取捨の基準や理由が明示されなければならないはずなのに、そこに何らの理由説明もないことは大きな問題であろう。

そして(2)だとするならば、過去に刊行され、あるいは現在も使われている国語教科書への批判を背景に、これこそが本来教科書に載るべきだった作品、あるいは(教科書は絶対でなく投げ込みの教材として自らが見出した教材を教室で採り上げるのは、あるべきことではあり)教科書という狭い枠を越えてまさしく〈教室の中〉に持ちこまれるべき新教材と言える作品が発掘、紹介されて、その価値が論証されるというものになろう。そうなれば本書が採り上げている作品は、検定教科書に載っているか否かを超えて教材として優れた村上春樹作品なのだ、というアピールになるはずで、それはそれで批評的な意義の高い研究書になったはずだろう。

しかし実際に取り上げられている教科書掲載以外の作品は「象の消滅」「パン屋再襲撃」「レーダーホーゼン」「沈黙」の4作品のみである。もし(2)を謳うのであれば、圧倒的に数の多い(2)の中に(1)の数作が紛れこむというのがあるべき姿であり、その逆では(もちろん(1)は網羅的であらねばならないが)(2)として選ばれた作品の恣意性が著しく目立ってしまう。そこからは、膨大な数にのぼる村上春樹作品の中で編者二人が考えた新規教材たりうる作品、あるいは検定教科書に加えられる教材というのは、たった4作品だけなのか、という不満も出かねまい。〈今後には教材化が望まれる作品のいくつかを集約し〉(「まえがきに代えて」)と述べられているが、なるほど「沈黙」は(後の一覧で紹介するとおり)確かにその後教科書に収録されているが¹³、本書刊行後の改訂版教科書に採り上げられているような作品(「鉛筆削り」、「とんがり焼きの盛衰」、「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」、「自己とは何か(あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方)」)があるのに、それを見つけられなかったというのでは、高等学校教科書の元編集委員と現編集委員でもある二人の編者としては恥じるべきなのではないか、と。

しかしもちろんその批判は酷にすぎるものである。そもそも教科書に採られていない作品で教材価値のある作品というのは探せば山のようにあるはずであるし、ある一つの作品がその教材化次第で良い教材になることもあればまったく教材価値を持たない作品に墮すこともあるのだ。であるからこそある教材化の結果良い教材となった作品が後に出てきたからと言って、それを見落としたという責めを負わせるのは不当にすぎよう。

12 もちろんその根拠を示そうにも、〈教室〉を謳う時に小学校の教室を排除したり、国語の科目のひとつであった「現代語」を排したりすることへの説得力ある理由付けは難しいと思われるが。

13 しかしそもそもこれは全国学校図書館協議会による謂わば読書会教材として刊行されていた、つまり既に〈教室〉ではなくともある種の教材として見做されていたと言える。

しかしそうであれば、〈教科書〉に載っていようがいまいが〈教室〉に持ちこむ際には十分な教材化がなされなければならないのであり、問われるのは教材化の程や教材化の質であるはずなのだが、残念ながら『〈教室〉の中の村上春樹』所収論文の中には指導書をはじめとする先行研究を見ようとししないものもあるし、あろうことか小説仕立てのものまでがあるのだ。

そもそも先の〈数多い「ムラカミ本」の中に、春樹の文学及び教材の価値について本格的に論じようとしたものが見当たらない〉という「まえがきに代えて」の〈不満〉における〈教材の価値〉についてはその通りだとして、それが〈文学及び教材の価値〉という形で無造作に並列させられていることにも明らかなように、本書では文学／教材の区別が曖昧なのであり、ここで集められた論稿は(3)教材論の集成なのか、(4)作品論の集成なのかが判然としないのである。各作品の実践報告を行なうか教材論として扱うかという^{たが}籓を嵌めておかない限り、それこそ〈アナーキー〉な状態になってしまい、恣意的に自分（たち）が選んだ任意のいくつかの作品についての論文を並べただけで一冊として纏められた、ごく普通に流通している村上春樹作品論集の一冊と何ら変わらないことになってしまい、「まえがきに代えて」謳われた〈教材価値を明らかに〉することや〈春樹文学の新たな可能性を引き出すこと〉は叶わなくなってしまうだろう。優れた作品論である渥美孝子の「鏡」論¹⁴も、〈〈教室〉の中〉で行なわれた実践記録でもなければ教材研究というわけでもなく、国語教育的な研究史を周到に踏まえたものではあるものの、それは(3)教材論ではなくあくまでも(4)作品論として優れていたのであった。

その渥美論ではきちんと為されていた研究史を踏まえることを蔑ろにした論稿が見られることは前述したが、さらに言えば、本書は〈多忙をぬって力作論文をお寄せ下さった〉（「まえがきに代えて」）という言葉が予想させるような(5)書き下し新稿の集成ではなく、(6)既発表論稿の再録も含むものであるということも問題を感じさせる。¹⁵確かに〈教室〉に向かう前に行なう教材研究として、自身と生徒のためだけに行なわれるものには、（指導書

14 渥美孝子「村上春樹「鏡」—反転する語り・反転する自己—」

15 具体的には旧稿〈を改稿したものである〉と付記された「レキシントンの幽霊」論と、〈同名の論文の字句を若干改め、注の一部を加筆訂正したもの〉だと付記された「パースディ・ガール」論の二つである。

16 もちろん書き下しを求めなくてもよい、これ以上ない論があればそれを再掲することがあって悪いわけではないが、そして初出と再掲までの間の研究史が引くに値しないものであるなら、それを無視して一切の改稿をすることもないだろうが、たとえば「レキシントンの幽霊」論のように中途半端な手入れをされた論が載せられた場合、表題の〈〈教室〉の中〉に赴く以前の教員の行なう教材研究的な視点で言えば、きちんとした教材研究を行なおうとした時、あるいは作品研究史を踏まえた立論をしようとした時、〈改稿〉とはどの程度のものなのかがわからない中で、ほとんど変わらない論の2つを比較しながら読ませられ、その照合を強いられ、どちらを引くべきか迷わされることになり、迷惑この上ないのである。

丸写して臨むことも可能であり) その考察のオリジナリティもプライオリティも無用かもしれないが、それを国語教育の論として世に問う以上は、それを蔑ろにする立論(あるいはそれを許す依頼をする編集)には疑問を禁じえない。¹⁶

Ⅲ 〈教科書〉の中の村上春樹

さてそうした((1)を対象に(3)の形で(5)のように集めてほしかったという不満を禁じえないという)意味で(もちろん所収論文の中にはそれ自体として耳を傾げざるを得ない示唆や、目を瞠らされる新見に富んだ論稿もいくつかはあったものの)、〈〈教室〉の中の村上春樹〉を考える際に、あるいはその前にきちんと押さえられるべき〈教科書〉の中の村上春樹を考えようとした際に、最も有効なものは、むしろ付録として付載された佐野正俊「村上春樹作品の教科書掲載教材リスト」だと言えるのではないかと思ってしまうのである。しかしこうした仕事の常ではあるが(本稿もまたそれを免れないかもしれない)遺漏や誤記も散見するし、刊行後四年半経過している(したがって調査対象は2008年度版までで終わっているし、その後平成20(2008)年の指導要領の改訂に伴って各社大幅な改訂を行っている)ので、追補すべきものもたくさんある。

ということで、本稿も本来なら各教材を通覧することを通して村上春樹文学の持つ教材としての可能性を考えたいところだが、まずはその前段階として佐野氏の仕事に敬意を表しつつ補足をさせてもらうことに留めたい。〈序説〉と副題した所以である。

そして佐野氏のリストには上記の遺漏とは別に、より活用しやすいものにしてほしかったという不満も残る。それは学校現場や教科書の改訂過程に明るくない者には、ある作品が教材としてある教科書に掲載されたことはわかって、それがどのくらい続いたのかが見えにくいということである。その教科書が何年度まで使われていたのか、他社の本との比較ができれば他社が改訂版を出しているのに当該教科書は出されていないからその年度の前までしか使われていなかった、というような算出ができるものの、当該作を載せている本が1社1冊しかなかった場合には、その教科書がいつまで流通していたのかを知るためには、他の作品のと同じ科目の教科書の改訂時期を調べてから算出するという手間がかかるのである。そのみならず、実はそうした概算では漏れも出かねないのだ。現在では各社とも「現代文」なら「現代文」で、『標準現代文』と『精選現代文』といった具合に、何冊もの(多少の差異化を図った)本を出すことで少しでも多くのシェアを獲得しようとしているが、市場優先主義でシェアの低い本は次年度からの刊行を止めたりする例もあって、本当のところ、その年度にいったい何冊のどの教科書が学校現場に供されていたのかについては、はなはだわかりにくいのである。

そこで本稿では、一般社団法人教科書協会の出している各年度使用『教科書定価表』に

したがって、当該教科書が刊行・販売・採用されていた年度を教科書名の後に列記することで、その継続性を眺め渡せるように配慮した。それによって村上春樹のどの作品がどの程度学校教育の場で児童・生徒に読まれているのかをある程度は示せることになったはずである。¹⁷

以上の趣旨を踏まえるなら、本来なら、各学年を縦の行にして、年度を横の列にした一覧表の中に各教材を配するよう一覧表にして、毎年どの年齢の児童・生徒にその教材が供され、それがどの年度まで続いたかを一望できるようにすることで、村上春樹作品の教材としての普及の在り方の推移を見渡せるようなものを作るべきかもしれない。そのことによって、たとえば（現在からのパースペクティブではかなり意外なことに見えてしまうが）当初の村上春樹の教材化は小学校・中学校という低年齢児童・生徒を対象に始まって徐々に対象年齢が上がっていった、ということなど面白いことにも気づけるはずなのだが、（それには「現代文」などを2年次に配当するか3年次に配当するか等各学校のカリキュラムに任せられている中では正確なものを作りにくいということもあり）今回は果たせなかった。次の機会を待ちたい。

そのことによって、村上春樹作品の国民的なレベルでの普及の程度も見渡したいという思いがあるのだが、勿論そのためには掲載教科書の数だけでは本当のところはわからず、それをより見えやすくするためには各社各教科書のシェアをそこに乗じていかねば実数は見えないし、その教科書が採択されていたからといって教科書掲載教材の全てが実際に教室で使われるわけではない以上、そこにはおのずと限界があるのだが、たとえば「鏡」が定番教材化して普及していくありかたなどが、より一層見えやすくなるはずであり、それらを見渡すことで「本説」としての「教科書の中の村上春樹」あるいは「教材としての村上春樹」をいずれは論じたいと思っている。

17 ある年度に使われていた教科書が次年度にも発行されていたのか、次々年度はどうだったか、という問題に関しては、それらを見易く整理してくれた網羅的な目録というものは存在しないので、しらみ潰しに当たっていくしかないのだが、自分の眼で確かめようとしても現物を陳列しているような場所はないのだ。学校現場ではもちろん現行版以外には参考程度にしかストックを置かないし、改訂がなく前年度と変化がないのに毎年分の教科書を全部揃えた書架を並べるようなかたちで全ての教科書を展示しているような図書館はあろうはずもなく、便利な「教科書図書館」にしても配架されているのは改訂がなされた年度の教科書だけである。そこで結局のところ現物を自分の眼で確認するのは諦めつつ、各社の編集部なり営業部なりに尋ねまわるかしかないかという中で、便利なものが一般社団法人教科書協会の出している各年度使用『教科書定価表』なるものであり、それによって、その年度に実際に販売され、学校現場で採択され、生徒が手に取っていた（あるいはその可能性のある）教科書の全てを知ることができるのである。2016年度に関しては『中学校用教科書目録』（文部科学省、2015年4月）および『高等学校用教科書目録』（文部科学省、2015年4月）によった。なお、『教科書定価表』『教科書目録』に関しては教育出版株式会社の玉井久美子氏からご教示を受けた。記して感謝したい。

以下、次節に掲げる「村上春樹教科書掲載作品一覧」の凡例的なことを記しておく。全体の体裁は佐野版リストに倣いつつ、各教材の細かな書誌については『村上春樹作品研究事典増補版』（村上春樹研究会編、鼎書房、2007年10月）に譲ることにして、ここには出典刊本の名前のみを掲げた。

まず「教材名」を示し、（所収刊本名）を示して見出しとした。

配列は掲載教科書の刊行年度順にし、同じ年度の中では教科書対象学年の低い順、さらにその中では教材となった作品の成立順として、全教材数を把握しやすいようにするためにも、通し番号を打った。

次に『掲載教科書名』（版元名）を掲げた。

その後に、追跡調査可能なように（文科省割り当ての）教科書番号を付記した。

その後に、上記の継続性を可視化するために、その教科書が使用（販売）されていた年度を西暦で列記した。

佐野版との違いも明らかにすべく、（それ以降の追補について（つまり2000年以降）は、自明ながらも、その間の増加ぶりを分かりやすいようにするためにも敢えて除くことなく）、佐野版での遺漏の追補分と誤記訂正については下線を施しておいた。

Ⅳ 村上春樹教科書掲載作品一覧

- ① 「西風号のそう難」（『西風号の遭難』クリス・ヴァン・オールズヴァーグ原作）¹⁸
『国語六下』（光村図書）国語 642 1989・1990・1991
- ② 「ノルウェイの森」（『ノルウェイの森』）
『高等学校国語Ⅰ 三訂版』（三省堂）国Ⅰ 115 1991・1992・1993
- ③ 「ジャック・ロンドンの入れ歯」（『村上春樹雑文集』）
『新しい国語3』（東京書籍）国語 901 1993・1994・1995・1996
- ④ 「鏡」（『カンガルー日和』）
『新編 現代文〔新訂版〕』（東京書籍）現文 058 1993・1994・1995・1996
『新国語二』（尚学図書）国Ⅱ 551 1995・1996・1997・1998・1999・2000・2001・
2002・2003・2004
『国語Ⅰ（現代文編）』（東京書籍）国Ⅰ 557 1998・1999・2000・2001・2002
『国語総合』（大修館書店）国総 010 2003・2004・2005・2006
『国語総合現代文編』（東京書籍）国総 003 2003・2004・2005・2006

18 原典では「西風号の遭難」が「西風号のそう難」とされ、〈西風〉は原典の〈せいふう〉が教材としては〈にしかぜ〉と読み方を変えられている。

- 『国語総合 改訂版』（大修館書店）**国総 034** 2007・2008・2009・2010・2011・2012・2013・2014
- 『新編 国語総合 改訂版』（大修館書店）**国総 035** 2007・2008・2009・2010・2011・2012・2013・2014
- 『国語総合 現代文編』（東京書籍）**国総 303** 2013・2014・2015・2016
- 『精選国語総合』（東京書籍）**国総 302** 2013・2014・2015・2016
- 『国語総合 現代文編』（大修館書店）**国総 311** 2013・2014・2015・2016
- 『精選国語総合』（大修館書店）**国総 313** 2013・2014・2015・2016
- 『新編国語総合』（大修館書店）**国総 314** 2013・2014・2015・2016
- 『高等学校国語総合』（明治書院）**国総 318** 2013・2014・2015・2016
- 『精選国語総合 現代文編』（明治書院）**国総 319** 2013・2014・2015・2016
- 『現代文A 青春文学名作選―歴史の中の青春』（教育出版）**現A 302** 2014・2015・2016
- ⑤ 「ランゲルハンス島の午後」（『ランゲルハンス島の午後』）
『新国語I』（旺文社）**国I 520** 1994・1995・1996・1997・1998・1999・2000・2001・2002
- ⑥ 「レイニー河で」（『本当の戦争の話をしよう』ティム・オブライエン原作）
『精選現代文』（教育出版）**現文 510** 1995・1996・1997・1998・1999・2000・2001・2002・2003・2004・2005
『新現代文』（教育出版）**現文 537** 1999・2000・2001・2002・2003・2004・2005
- ⑦ 「待ち伏せ」（『本当の戦争の話をしよう』ティム・オブライエン原作）
『新版 高校現代文』（日本書籍）**現文 522** 1996・1997・1998・1999
『精選国語総合現代文編』（筑摩書房）**国総 016** 2003・2004・2005・2006
『高等学校国語総合 改訂版』（三省堂）**国総 029** 2007・2008・2009・2010・2011・2012・2013・2014
『精選国語総合現代文編〔改訂版〕』（筑摩書房）**国総 039** 2007・2008・2009・2010・2011・2012
『高等学校国語総合 現代文編』（三省堂）**国総 305** 2013・2014・2015・2016
『精選国語総合 現代文編』（筑摩書房）**国総 321** 2013・2014・2015・2016
- ⑧ 「夜のくもざる」（『村上朝日堂超短篇小説 夜のくもざる』）
『現代語』（東京書籍）**現語 534** 1998・1999・2000・2001・2002・2003・2004・2005
- ⑨ 「レキシントンの幽霊」（『レキシントンの幽霊』）
『精選現代文』（大修館書店）**現文 538** 1999・2000・2001・2002・2003
『新編 現代文』（三省堂）**現文 005** 2004・2005・2006・2007

- 『精選現代文』(大修館書店) **現文 008** 2004・2005・2006・2007
『精選現代文 改訂版』(大修館書店) **現文 038** 2008・2009・2010・2011・2012・
2013・2014
『高等学校現代文改訂版』(三省堂) **現文 032** 2008・2009・2010・2011・2012・2013・
2014
『精選現代文B』(三省堂) **現B 304** 2014・2015・2016
- ⑩ 「七番目の男」(『レキシントンの幽霊』)
『高等学校 改訂版 現代文2』(第一学習社) **現文 556** 2000・2001・2002・2003
『高等学校現代文』(第一学習社) **現文 017** 2004・2005・2006・2007
- ⑪ 「一日ですっかり変わってしまうこともある」(『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』)
『高等学校 新編 国語総合』(第一学習社) **国総 021** 2003・2004・2005・2006
『高等学校 改訂版 新編 国語総合』(第一学習社) **国総 046** 2007・2008・2009・
2010・2011・2012
- ⑫ 「ささやかな時計の死」(『村上朝日堂 はいほー!』)
『新現代文』(筑摩書房) **現文 015** 2004・2005・2006・2007
『現代文 新訂版』(筑摩書房) **現文 045** 2008・2009・2010・2011・2012・2013
- ⑬ 「ふわふわ」(『ふわふわ』)
『国語2』(中学、光村図書) **国語 810** 2006・2007・2008・2009・2010・2011
- ⑭ 「バースディ・ガール」(『バースディ・ストーリーズ』)
『伝え合う言葉 中学国語3』(教育出版) **国語 909** 2006・2007・2008・2009・
2010・2011
『伝え合う言葉 中学国語3』(教育出版) **国語 925** 2012・2013・2014・2015
『中学国語 伝え合う言葉3』(教育出版) **国語 930** 2016
- ⑮ 「青が消える」(『村上春樹全作品1990-2000①』)
『新 精選国語総合』(明治書院) **国総 037** 2007・2008・2009・2010・2011・2012
『精選国語総合』(三省堂) **国総 307** 2013・2014・2015・2016
『現代文A』(大修館書店) **現A 304** 2015・2016
- ⑯ 「カンガルー日和」(『カンガルー日和』)
『精選現代文』(東京書籍) **現文 030** 2008・2009・2010・2011・2012・
2013・2014・2015・2016
『現代文A』(東京書籍) **現A 301** 2014・2015・2016
『新編現代文B』(東京書籍) **現B 301** 2014・2015・2016
- ⑰ 鉛筆削り(『夜のくもざる』)

- 『中学生の国語 学びを広げる 3年』（資料編 三省堂）国語 924 2012・2013・2014・2015
- ⑱ 「とんがり焼きの盛衰」（『カンガルー日和』）
『国語総合』（筑摩書房）国総 323 2013・2014・2015・2016
- ⑲ 「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」（『夜のくもざる』）
『新編国語総合 言葉の世界へ』（教育出版）国総 310 2013・2014・2015・2016
『高等学校現代文B』（明治書院）現B 314 2014・2015・2016
- ⑳ 「沈黙」（『沈黙』）
『精選現代文B』（筑摩書房）現B 315 2014・2015・2016
- ㉑ 「自己とは何か（あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方）」（『村上春樹雑文集』）
『探求現代文B』（桐原書店）現B 319 2014・2015・2016
『現代文B』（桐原書店）現B 320 2014・2015・2016
- ㉒ 「ポテト・スープが大好きな猫」（『ポテト・スープが大好きな猫』テリー・ファリッシュ原作）
『現代の国語 2』（中学、三省堂）国語 829 2016